

印欧語人称代名詞の語根について

山口 巖

1. 言語類型

§1 既に色々なところで述べてきたことですが、初めてこの論文に接する人のために、簡単に言語の内容的類型についての説明をしておきたいと思います。これは帝政期ロシア、ソヴェト期を通じた研究者達の言語研究の成果として、1970年代に当時のソヴェトのクリモフ [3][4][5] を代表とする言語類型学が成立しました。簡単に言えばこれは言語が、「主語・述語・目的語」の関係の表現のあり方によっていくつかの類型に分たれることを示すものです。そのような類型として「活格言語類型」、「能格言語類型」および「対格言語類型」が指定されました。そして能格言語類型はやがて対格言語類型に発展すること、並びに活格言語類型のばあいは、能格言語類型を経由して、対格言語類型へ発展するものと、直接に対格言語類型に発展するものがあることが示されました。

活格言語類型は、森羅万象を生き物であるかそうでないかに分類することを、その成立の原理にするものだといえます。この原理はこの類型の構造の全体を貫くもので、たとえば動詞は「横たわる」という意味を持つものでも生き物に関して言うばあいとそうでないばあいとは語彙的に異なるというように、活格動詞と絶対動詞の区別を文法的にもっていること、生き物を指す名詞は行為者を表す格(活格)と被行為者を表す絶対格をもっているが、無生物を指す名詞は絶対格しかもたないこと、いわゆる自動詞と他動詞の区別はもたないこと、したがって能動と被動というような相の区別がないこと、などの特徴を持っています。この種の言語には形容詞は無く、これに当たる意味内容をもつものは、動詞として扱われています。したがって無生物でも意味上の「主語」になることは可能です。また行為を表すばあいでも、たとえば「石・動く」という文は、普通には意味を為さないかもしれませんが、これに生き物を表す名詞の行為者を表す「活格」が加わると、「太郎が・石・動く」という文になり、対格言語では「太郎が・石を・動かす」という文と同等の意味を持つことになります。

逆に生き物を表す語が、行為者を示さない「絶対格」として「死ぬ」という動詞に連結すれば、「太郎・死ぬ」という意味になりますし、これに生き物で行為者を表す「活格」が加われば、「次郎が・太郎・死ぬ」となり、対格言語の「次郎が・太郎を・殺す」と同等の意味を持つことになります。

すなわち、この種の言語では「絶対格」は意味上の自動詞の主語とも、意味上の他動詞の目的語にもなりうるのです。これに対して「活格」は行為者しか示しません。

一方対格動詞は、文法的に他動詞と自動詞の区別を持ち、主格と対格を区別します。主格は自動詞とも他動詞とも用いられ、自動詞と用いられるときには動詞の行為主体か、あるいは状態の持主を表します。言換えれば、この種の言語では、主格は自動詞の主語にも、他動詞の

	活格言語	対格言語
A	活 格	主 格
S	絶対格	
P		対 格

主語にもなれますが、対格は絶対に自動詞の主語にはなれないのです。また他動詞と用いるときには、動詞の表す行為を対格で表される対象に及すことを表します。したがって能動、被動という範疇は、対格言語類型の段階に置いて初めて可能になったものです。

これを図にすれば、右のようになります。ここでSはSubject、すなわち意味上の自動詞の主語をあらわし、AはActor、すなわち行為を他に及すものを、PはPatient、すなわち行為を受けるものを表します。

2. 人称

§2 人称は通常3つで、1人称、2人称、3人称を区別します。しかし人称が三つに限られなければならないという理由は一般に存在していません。

アメリカのナデネ語族に含まれるアタバスカン諸語に属するナヴァホの言語のように、4人称をもっている言語もあると言われています。これはたとえば一族の「彼」と他の種族の「彼」とがいるときに、これらを区別することができます。純理論的にいえば、例えば2人称から見た3人称は1人称から見れば何人称になるかとか、3人称から見た3人称は2人称から見れば何人称になるかというように、多くの「人称」が措置できます。しかし人称の数が多くなると、使い分けが極めて難しくなることは明らかです。三つの人称を区別する言語が多いのは、そのためであろうと思われます。

人称について活格言語に特徴的なものとして、1人称複数に包含形 *inclusive form* と排外形あるいは非包含形 *exclusive form* とがあります。その違いは聞き手を共に行為

者であるか、あるいは共に被行為者であるという意味で範疇を同じくする「我々」の中に含めるかどうかという点にあります。相手が「我々」に含まれるときには包含形が、含まれないときには排外形が用いられるのです。

たとえばグアラニ語では *yane-* 「(おまえを含めた) 我々」に対して *ore-* 「(おまえを含めない) 我々」という形が対立しています。

上で述べましたように、活格言語は対象を生き物かどうかによって区別し、さらに生き物については、「行為者」であるかないか、すなわち「活格」に立つか「絶対格」に立つかを区別することを原理としています。

したがって相手が一緒に意味上の他動詞で表される行為を行うかどうかは、この原理に関わる現象だと考えられます。そうとすれば、これは活格言語の包含事象だということができます。この原則を持っている言語のばあい、それに伴って2人称のばあいには、行為に参加することは、原理的にあり得ないことになりましょう。行為に参加するとすれば、それはすでに1人称複数の包含形と認定されるからです。

能格言語のばあいにも、先にいいましたように、能格動詞と絶対動詞との区別はかなり対格言語の他動詞と自動詞に近くなってきてはいますが、生き物に典型的な行為には意味的には自動詞であっても、まだ能格動詞に属するばあいがあります。したがって未だ完全な自動詞と他動詞の区別は、この類型の言語には存在していなかったと考えられます。

また活格言語の包含事象であり、したがって活格類型の時代から受継いだ、自動詞的にも他動詞的にも使われる *diffused verbs* も随伴事象としてもっています。

したがって格の体系も、能動的に行為を他におよぼすことを表す能格に立つかどうかという対立をもっています。このようなわけで、能格言語は、形の上ではまだ活格言語の格の体系に対応した体系をもっています。したがって包含形と排外形の対立は、能格言語のばあいでも包含事象だということができます。

§3 一方、印欧語比較文法では、印欧語の1, 2人称代名詞複数の祖形がよく分っていません。なぜ分らないかというと、さまざまな言語に現れるこれらの代名詞をもとに再構成をしてみると、**wei-*, **mes-* および **ne-* の形が得られますが、これらの形が言語によってさまざまな分布を示しているからです。

たとえば1人称複数はサンスクリットで *vay-ám*, アヴェスタで *va-ēm*, ヒッタイト語 *weš*, ゴート語 *weis* (英語の *we*, ドイツ語の *wir*) などに対して、ロシア語では *mes*, スラヴ語では *мы* (*my*) のようになっています。

ラテン語の *nōs* (フランス語の *nous*) は **ne-* の語根にさかのぼると考えられます。またラテン語では **wei-* にさかのぼる形の *vōs* (フランス語 *vous*) は 1 人称ではなく、2 人称の複数形です。

ロシア語はスラヴ語ですから、基本的には形が同じですが、*MLI* (*my*) の変化は右の表のようになります。

このばあい、主格は **mei-* にさかのぼる形ですが、斜格 (主語以外の格) はすべて **ne-* にさかのぼる形だと考えなければなりません。

また 2 人称複数 *BLI* (*vy*) で、ラテン語やフランス語と同じく **wei-* にさかのぼる形をもっていますが、同じことはドイツ語にもいえます。

1 人称複数形		
格	綴り	ローマ字化
主格	МЫ	my
生格	нас	nas
与格	нам	nam
対格	нас	nas
造格	нами	nami
前置格	нас	nas

1 人称複数の主格は上に述べたように **wei* にさかのぼる *wir* をもっていますが、斜格は第 2 格 *unser* 第 3 格 *uns* 第 4 格 *uns* のように、**ne-* にさかのぼる形をもっているのです。

さらに双数をもっているもののばあい¹、1 人称双数はサンスクリット *nau*、アヴェスタ *nā*、ギリシア語 *nō v ōi* (*we two*, Dual Nom.-Acc.), スラヴ語 *на* (*na*) で **ne-* にさかのぼる形をもっているのに対し、2 人称双数のばあいには、ヴェーダ *vām*、アヴェスタ *vā*、スラヴ語 *вѣ* (*vě*) のように、**wei-* にさかのぼる形をもっています。

ここでスラヴ語のばあい **ne-* に由来する形と **wei-* に由来する形の両方があげられていますが、これは表に上げた複数のばあいと同じように、格によって異なっているためです。

§4 こういうように、印欧語の 1 人称および 2 人称複数および双数の形は、

1 ・ 2 人 称 双 数 形				
	1 人称双数		2 人称双数	
主格	вѣ	vě	ва	va
対格	на	na	ва	va
生所格	наю	nyu	ваю	vayu
与造格	нама	nama	вама	vama

言語によってさまざまな分布を示しているのも、その本来の形がどういうものであったかははっきりしないというのが従来の印欧語比較言語学の立場でした。

メイエ (Antoine Meillet 1866-1936) は、「人称代名詞の形は言語ごとにも

¹ 双数 *dual* というのは、二つの対象を指すときにとる形です。双数を持つ言語は 3 以上の対象を指すときに複数を用いることになります。印欧語は歴史に現れたとき、双数を持つものがありました。サンスクリット、ギリシア語、古教会スラヴ語をはじめとするスラヴ語派の多くの言語がこれに属しています。

異なるために、印欧語の状態を再構成することはできないが、いくつかの特徴は認められる」[1]とっています。

印欧語比較文法に内容的類型学を全面的に導入したガムクレリゼとイヴァーノフ ([2]) は、印欧語についても他の活格言語と同じように、複数 1 人称に包含形と排外形の区別があるとして、*wei- の形を包含形、*mes- の形を排外形であると主張しています。印欧語が活格言語から発達したと考えれば、そしてまた包含形と排外形が活格言語の包含事象だとすれば、印欧語に包含形と排外形の対立があった蓋然性は高いと考えられます。

しかし *wei- の形を包含形とし、*mes- の形を排外形とする根拠は乏しいと考えられます。

むしろここではこれら三種の語根の分布そのものについて、考えてみる必要があるのではないかと思います。これは既に述べたように印欧語では 1 人称の双数と複数、2 人称の双数と複数に分布しています。

§5 ロシア語の複数 は右の表に見られるようになっています。

これらの表を眺めると、まずロシア語では *mes- を語根とするものは 1 人称複数の主格 MLi に現れるだけです。斜格はすべて *ne- にさかのぼる形です。

また *wei- の形は 2 人称複数および双数の諸格、並びに 1 人称双数の主格に現れています。更に *ne- にさかのぼる形は 1 人称の斜格の他に 1 人称双数の斜格にも現れています。

これに対して *mes- の形は 1 人称複数にしか現れていません。主格というのは斜格に比べて一般に変化を受けにくいことを考えれば、これが 1 人称複数に固有の形だといってもよいと思われます。そう考えるもう一つの大きな理由は、主格は活格言語の活格、能格言語の能格に対応し、これから発展したものだと考えられるからです。そしてこれらの格は、いずれも専ら行為者を表すことをその機能としています。これに対して斜格は行為者を表すことはありません。その意味で主格と斜格との間には、大きな性格の相違があると言えましょう。

一方 *wei- の形は 2 人称複数の諸格に現れており、その他に 1 人称双数の主格、2 人称双数の諸格に現れています。そうとすればこの形は 2 人称の複数に固有の形である

2 人 称 複 数 形		
格	綴り	ローマ字化
主格	ВЫ	vy
生格	ВАС	vas
与格	ВАМ	vam
対格	ВАС	vas
造格	ВАМИ	vami
前置格	ВАС	vas

うと思われます。

そうとすれば *mes- と *ne- の形は 1 人称の複数に固有の形である可能性が高いと考えられます。

また *ne- の形は 1 人称双数には現れても 2 人称の双数にも複数にも現れません。1 人称の双数に現れるということが話し手と聞き手をひっくるめるような状況において用いられる可能性が高いことを意味するとすれば、そしてこれが複数においても双数においても主格には現れないこと

を考えれば、これが無生物の 1 人称複数形であることを示唆するものと考えられます。

そうすれば *mes- という語根は生き物を表す 1 人称複数であるということになるでしょう。

もし双数というものがこのような性質を持っていると仮定すれば、なぜ 2 人称の双数に *wei- の語根が一般化したかを説明することが容易になります。

活格言語あるいは能格言語の類型においては、包含形と排外形の対立は 1 人称複数に限られていました。そうすると生き物について述べる *mes- の語根に対応するものとして、*wei- は無生物を表すものとして借用された可能性が高くなります。しかしこれが主格に借用されたとすれば、本来はこれもまた生き物を表すものであった可能性が高くなります。もしそうとすれば、これが 1 人称の無生物を表すものとして借用されたのは、これが 2 人称であったために *mes- に較べて「行為性」あるいは「能動性」が相対的に低いと考えられたためかもしれません。2 人称のばあいは「おまえたち」ないしは「おまえたち二人」を意味し、話し手は含まれませんから、これは排外形として用いられた可能性があります。

もし以上のことが成立つとすれば、更に一步を進めて双数というカテゴリーが包含形に起源を持つということが出来るかもしれません。仮説として提示しておきたいと思っています。

3 形 の 分 布				
格	1 人 称		2 人 称	
	複 数	双 数	双 数	複 数
主 格	*mes-			
生 格	*ne-		*wei-	
与 格				
対 格				
造 格				
前置格				

3. 数

§6 数の問題が出てきましたので、活格言語の数の問題に触れておきたいと思います。

活格言語には文法的な「数」のカテゴリーは未発達だったと考えられています。これは名詞に複数形がないことによっています。

しかしこのことから、活格言語が数の観念を持っていなかったということではありません。たとえばインディアンのチヌークの言語では、単数のものを見るときは *el-kel* という動詞を使い、複数のものを見るときは *ē-taqL* という形を使うといえます。

能格動詞のばあい、たとえば古グルジア語では名詞は複数の要素をとることができますが、その際意味上の自動詞のばあいは主語が複数であるかどうか、意味上の他動詞のばあいには目的語、すなわち絶対格が複数であるかどうかによって、動詞が複数の形をとるといいます。これを *n concord* というそうです。たとえば

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| <i>daleč-n-a kalak-n-i</i> | 「(彼は) 破壊した (複数) 町 (複数)」 |
| | = 「彼は複数の町を破壊した。」 |
| <i>moguc-na-a kac-n-i</i> | 「(彼は我々に) 与えた (複数) 人 (複数)」 |
| | = 「彼は我々に人々を与えた。」 |
| <i>ganaxu-n-a tual-n-i</i> | 「(彼は) 開いた (複数) 目 (複数)」 |
| | = 「彼は両目をあけた。」 |

これらのことから、最初文法的な数については、述語である動詞に表示が付加され、これを説明する絶対格に立つ名詞には、数の表示はなかったと思われます。後になって名詞にも数の表示がつくようになったものが、古グルジア語に見られるような *n concord* であったと思われるのです。

序に言えば、グルジア語で他動詞のばあいに複数の要素をとるのが、絶対格の数によるというのは、明らかに対象活用であり、活格言語、能格言語の包含事象と考えられます。

しかしこのような現象は活格言語あるいは能格言語だけに特有のものではありません。

たとえば英語でも *go* 「行く」、*come* 「来る」に対して *troop* といえば、「群をなして進む」という意味になり、主語が複数であることを含意しています。*kill* 「殺す」に対する *massacre* 「虐殺する」という語も、対象が複数であることを示しています。*march* 「行進する」という語も、対象が複数であるときに用いられるのが本来の使用法であっ

たと思われます。ただ異なるのはこれらの動詞が文法的に複数のカテゴリーを示すのではなく、語彙的な意味のレベルでこれを表しているにすぎないということです。

文法的なカテゴリーとしての数というものがどういう性質のものかということについては既に別のところで考察しましたので [7, cf. pp.552-573] ここでは言語の類型と数という観点からの観察にとどめることにします。

関係文献

- [1] Antoine Meillet

Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, Paris 1964.

- [2] Тамаз Валер Гамкредидзе & Вячеслав Всеволодович Иванов

Индоевропейский язык и индоевропейцы, Реконструкция и историко-типологический анализ праязыка и протокультуры, I-II, Тбилиси 1984.

- [3] Георгий Андреевич Климов

Очерк общей теории эргативности, Москва 1973.

- [4] Георгий Андреевич Климов

Типология языков активного строя, Москва 1977.

- [5] Георгий Андреевич Климов

Принципы контенсивной типологии, Москва 1983.

- [6] 高津春繁

『印欧語比較文法』岩波全書 187, 1954.

- [7] 山口巖

「時称とアスペクトをめぐって — とくに過去時称を中心に — 『ことばの構造とことばの論理』日本古代ロシア研究会 1998.

Abstract

Indoeuropean radices of personal pronouns

Iwao YAMAGUCHI

Concerning radices of personal pronouns, though we can identify three different radices, *wei-, *mes- and *ne, it has been difficult to determine from a comparison of languages belonging to the Indo-european language family their exact meaning owing to the complicated distribution of these radices among singular, dual or plural forms of 1st and 2nd persons. Even in the same person and the same number, the nominative case often uses a quite different radix as compared with other oblique cases.

However, if we take into consideration the hypothesis, rendered by G.A.Klimov, that Indo-european languages developed from the stage of the active language directly into the accusative language stage and that nominative case corresponds to the active case of the latter, it may be possible to surmise that *mes-, *ne are proper to the 1st person plural, with the exception that the former inherited the active case and the latter the absolute case of the active language stage, because while *mes- appears only in nominative plural, *ne- appears also in dual but never in the nominative case.

On the contrary, *wei- can appear in the nominative case of the 1st person dual and all cases of 2nd person dual and plural. If we take into consideration the circumstances that it is used in all cases of the 2nd person dual and plural and surmise that this radix originally meant 2nd person plural, it may be quite understandable that it could be used in nominative dual of the 1st person since that speaker may, according to circumstances, consider the hearer as co-actor of his action.